蛍光発生トランスジェニック・ラットがもたらすイノベーション

Color-Engineered Rats and Luminescent Imaging: Innovation to Visualize Biological Processes

村上孝*,小林英司

自治医科大学分子病態治療研究センター臓器置換研究部

Takashi Murakami, Eiji Kobayashi

Division of Organ Replacement Research, Center for Molecular Medicine, Jichi Medical University

Abstract

The rat represents an excellent mammalian model for broadening medical knowledge, and a wealth of information on its physiology has been obtained from its use as an experimental organism. Its ample body size allows various surgical manipulations that cannot be performed on a mouse. Many rat models mimic human diseases and have therefore been used in a variety of biomedical studies. In an effort to create specifically designed rats for new biomedical research and the field of regenerative medicine, we developed an engineered rat system on the basis of transgenic technology and have succeeded in establishing unique rats that possess genetically encoded color probes. In this review, we describe the potential of the photogenic transgenic rat that expresses fluorescent and/or luminescent proteins, and focus on the characteristic migration of MSCs to injury and tumor sites. In addition, we will discuss an efficient delivery method for targeting the injured site. Synergized with modern advances in optical imaging, the photogenic rat system provides innovative preclinical tools and a new platform on which to further our understanding of matters concerning stem cell biology.

Key words

Transgenic rat, Transplantation, Stem cell, In vivo imaging.

1. はじめに

われわれの研究の出発点は臓器移植にあり、「移植 された臓器や組織がどのような運命をたどるのか」、 また「移植臓器の生着を如何に延長させることができ るか」が大きな焦点であった. 心臓や肝臓などの実質 臓器を安定して顕微鏡下手術(マイクロサージェリー)により移植できる実験動物のサイズは「ラット」にある ". ラットは、マウスと比べて体サイズが 10 倍も大きいため、特定部位へのカテーテル挿入など、臨床医学で利用される種々の技術を応用することができる. われわれは、実際の医療応用への視点から「医療技術を模倣できる動物資源」に注目し、移植・再生医療を模倣できるモデル動物の実験を行なってきた. 本稿では、われわれがこれまで行なってきた蛍光・発光ラットのモデルとバイオイメージング技法を用いた研究を紹介する.

^{*} 自治医科大学分子病態治療研究センター〒 329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311 - 1 takmu@jichi.ac.jp

2. トランスジェニックラット・システム

実験動物としての歴史では、マウスよりもラットの 方が早く医学研究に応用されてきた背景があり、特に 薬理学や脳神経科学の分野におけるラットの実験デー タは現在の臨床医学・薬学研究の基礎となっている ¹⁾. ラットにトランスジェニック技術が応用されたの は 1990 年代初めになる 2)3). これまでトランスジェニ ック (Tg)・ラットの作製では、受精卵膜がマウスの ものに比べて脆弱なため、その作製効率が悪いとされ ていた.しかし、高度なマイクロインジェクション技 術が安定して行なわれるようになり、現在では高率に 遺伝子導入個体を得ることができるようになった、発 現されるタンパク質の性質に依存するものの,1匹の Tg ラットを得るためには少なくとも 100 個の受精卵 にマイクロインジェクションが必要とされる. また, 広範な組織に発現可能なプロモーターを有するベクタ ーが用いられても、組み込まれた染色体の位置やコピ 一数などの要素によって, 発現する臓器や発現量も異 なる性質がある. したがって, 広い用途での Tg ラッ トのライン化は必ずしも容易ではない.

生きた細胞を励起光下で観察できる蛍光タンパク質 は、細胞動態観察のみならず細胞内タンパク質の挙動 を観察する「biological light probe」として現代のバイ オサイエンスを支える重要なアイテムになっている 4). 実際,赤橙色や青色などの蛍光タンパク質との組 み合わせにより、細胞機能を「色分け」することがで きる. 傷害を受けた組織の機能的回復を目指す再生医 学研究では、移植した細胞や組織の運命を追跡する研 究は応用的な医療技術への方向性を決める重要な律速 段階となる. したがって、細胞機能を「色分け」し、 移植細胞が機能回復にどのように関与するか評価でき るシステムは極めて重要な意味をもつ. 生体イメージ ング技術が著しく発展の結果、応用的なバイオ研究を 目指す研究者にとっては、種々のバイオプローブを持 つトランスジェニックラットの利用価値は高く,移植 された細胞や組織の動態を「光」として追跡すること が可能である. 臓器移植研究への必要性から始まった 「color-engineered rat」(Table 1) の開発も進み、9種類 が再生医学を含む様々な研究分野に利用されている.

われわれの作製した GFP-Tg ラットは中枢神経系などで輝度が強く、神経前駆細胞を用いた再生医学研究に応用されている 5-7. 例えば、胎生 14.5 日から作製

Table 1 Color-engineered rat colonies.

Strain	Promoter	Marker protein
Wistar	CAGGS ^a	GFP⁵
Lewis	CAGGS	GFP
Lewis	Albumin	GFP
Dark Agouty	CAGGS	LacZ (β-garactosidase)
Lewis	ROSA26	LacZ (β-garactosidase)
Wistar	Albumin	DsRed2 ^c
Wistar	CAGGS	DsRed2, GFP (in Cre/LoxP system)
Lewis	ROSA26	Luciferased
Lewis	ROSA26	DsRed monomer

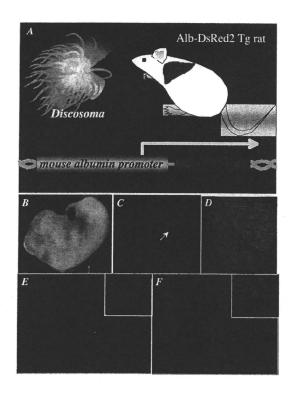
a, cytomegalovirus enhancer/chicken β-action promoter; b, green fluorescnt protrein (Aequorea victoria); c, DsRed (Discosoma); d, luciferase from the firefly (Photinus pyralis)

した神経前駆細胞は、脳質内に投与すると実験的脳梗塞部位に集積する性質がある。この主な神経前駆細胞の細胞集積には走化性因子受容体である CXCR4 やsphingosin-1- phosphate (S1P) 受容体の関与を示唆する結果が得られている ¹⁸⁶.

また、われわれは肝特異的に DsRed2 (赤橙色)を発現するラット % Cre/LoxP (DsRed2/GFP) ラットなども開発している 100. アルブミンプロモーターで作動する Alb-DsRed2 ラットから骨髄細胞を採取し、肝傷害を加えたラットに門脈投与すると、骨髄細胞が傷害肝内でアルブミン産生細胞に変化している様子が観察される (Fig. 1). 特に、この肝内でアルブミン産生細胞の増加は慢性肝傷害で顕著となる. さらに、Cre/LoxP (DsRed2/GFP) ダブルレポーターラットを用いると、切断下肢を移植した際の筋肉の融合が可視化され、DsRed2 から GFP の発現変化が観察することが可能となる. しかし、これらの蛍光タンパク質を用いた個体内での細胞・組織動態が観察できるようになるまでには、特定の生物現象が時間的に決定されている必要がある.

3. Double-Tg ラット作製とその応用

前述の蛍光タンパク質の検出には励起光源を必要とするが、発光タンパク質の「光」を 指標に評価する系がある. 例えば、ホタル由来のルシフェラーゼは、高感度で組織透過性と定量性に優れる光 (フォトン)を発生し、目的とする細胞や組織における遺伝子発現をリアルタイムに追跡することを可能にする. 生体を透



B Hemizygote Homozygote WT littermate

1.1x10° 2.8x10° 0.1x10°

C D F

Fig. 1 Alb-DsRed2 transgenic rats. (A) Representative scheme of liver-specific DsRed2 expression in the Alb-DsRed2 Tg rat and the mouse albumin/enhancer promoter. (B) A representative embryo of an Alb-DsRed2 Tg rat at 14.5 embryonic days after gestation. (C) Liver-specific DsRed2 expression was observed in (B) under 560nm excitation light. (D) A representative adult liver (4 weeks old) of an Alb-DsRed2 Tg rat. DsRed2 expression under 560nm excitation light. (F) Differentiation of BMDCs derived from Alb-DsRed2 Tg rats into albumin-producing cells with acute liver injury using CCl, and 2-AAF (xinjury using CCl4 and 2-AAF) ×400 original magnifi400 original magnification). The upper-right panel represents a high-power view) ×1000 original magnification). (F) Chronic liver injury by repeated administration of CCl4 induced differentiation of BMDCs from Alb-DsRed2 Tg rats into albumin-producing cells (×400 original magnification). The upper-right panel represents a high-power view (×1000 original magnification).

Fig. 2 In vivo luciferase imaging of injected MSCs from luciferase/ LacZ double Tg LEW rats. (A) Representative scheme of the transgene composition. The transgene consists of the ROSA26 promoter and a firefly luciferase gene. (B) Representative luminescent images of luc-Tg rats. Luciferase activity in the luc-Tg homozygote rat was almost twice that of the hemizygote rat. The value in the right lower corner represents total photons per animal (photons/sec). (C, D) Degeneration of the right tibial muscle of LEW rats was induced by treatment with 0.3 mL of cardiotoxin (10 μ M) 24 hr before MSC injection. Luciferase/LacZ MSCs (1×106) were injected into either tibial muscle (C) or the right femoral artery (D) of muscle-injured rats, and MSC-derived photons were monitored using IVIS™ (Xenogen). (E) Accumulation of luciferase/LacZ MSCs in the injured muscle at 10 days post-injection (β -gal staining). MSCs injected through the femoral artery. Original magnification ×400. (F) Relatively higher number of luciferase/LacZ MSCs (2.4×106) injected into the femoral artery of rats pretreated with cardiotoxin to induce muscle injury. Significant photons were observed in the lung and injured limb at day 0 post-injection (30 min).

過する最適な光(600nm)が得られるルミネセンス法は検出感度と定量性の点で非常に有利である.この発光原理に基づく場合は生体に「基質」を投与することで細胞内エネルギー(ATP)に依存した光を捕捉することができ、細胞生存と共役した画像イメージが得ら

れる. すなわち, 個体内における特徴的な生物現象をフォトン数により定量的に観察ができる. また, 生体に与える身襲も最小限であるため, 再生移植治療モデ

ルの長期的な観察に優れている。このような視点から 開発されたのが、基質(ルシフェリン)存在下で全身 が発光するルシフェラーゼ -Tg ラットである(**Fig. 2A** and **2B**) 11 .

骨髄に由来する間葉系幹細胞 (mesenchymal stem cell: MSC) は、その分化能に加え、分離・培養が容易 であるため、再生医療への応用が期待されている. さ らに、投与された MSC は種々の傷害臓器 (腫瘍部位 を含む)に蓄積する性質があり、その利点を活かした 研究が行なわれている¹²⁾. この利点は, ES細胞 (embryonic stem cell) の利用とは異なり、繰り返し MSC を用いても奇形種を発生しないことが挙げられ る 13)14). このような再生医療への応用を試験する目的 では、ルシフェラーゼ-Tg ラットを起点としたバイオ プローブの組み合わせは様々な再生医学研究に重要な 情報をもたらす. 例えば, ルシフェラーゼ-Tg ラット と LacZ-Tg ラットを交配した hemizygous-double Tg ラ ットは「時間 - 空間的解析」が可能な系といえる。す なわち、この系ではルシフェラーゼ発光とβ-gal 染色 が可能となる¹²⁾. ラット下肢筋肉を cardiotoxin で傷害 し、上記のダブルTgラット由来のMSCを局所注射し、 局部での MSC の存在は観察されるものの、傷害を受 けた下肢筋肉全体をカバーするには至らなかった(Fig. 2C). 対照的に, ラット下肢を支配する大腿動脈経由 でカテーテル法を用いて MSC を導入すると、効率よ く下肢全体に MSC を供給することができる (Fig. 2D and 2E) 12). これらの結果は、MSC のような幹細胞を 臓器特異的に移植する手段として経動脈的供給が優れ ていることを示唆している. その一方で、過剰の MSC は末梢毛細血管を通過し、再循環し一過性に肺 に蓄積する実験結果も明らかになり (Fig. 2F), 医療 応用においては MSC 投与による副作用(肺塞栓)の 発現に配慮すべきであることが示唆されている.

4. バイオイメージングの展望

様々なバイオプローブ開発が進み¹⁵, 細胞レベルでの研究は、これまで観察されてきた生物現象を分子間同士の相互作用を「光」として捉えることにも成功している¹⁶¹⁷. しかしながら、生体内で起こる複雑な事象を試験管内での実験結果や細胞培養系のみで捉えることでは決して充分とはいえない。革新的なイメージング技術の進歩によって、細胞の運命を生きた個体内で追跡しうる優れた方法が利用できるようになった現

在では、分子動態を生きた個体内の細胞挙動として機能的に捉えることが必要になりつつある。生命現象の中には生きた個体内でしか観察できない事象は多く、細胞治療を基盤とした再生医学研究におけるラットのバイオイメージングはユニークな系と考えられる。我々が開発してきた Tg ラットやモデル系が広く生命科学の分野において有効利用され、革新的な研究に貢献できれば幸いである。

謝辞:本研究の一部は,厚生労働省科学研究費補助金「政策創薬等総合研究事業」,「エイズ対策研究事業」 および「創薬基盤推進研究事業(生物資源研究)」によってなされたものである。また,本研究にご協力・ご助言していただいた諸先生方,ならびに臓器置換研究部の教室員の皆様に深謝いたします。

文献

- Murakami T, Kobayashi E: Color-engineered rats and luminescent LacZ imaging: a new platform to visualize biological processes. J Biomed Opt 2005; 10: 41204 (1-10).
- Hammer RE, Maika SD, Richardson JA, Tang JP, Taurog JD: Spontaneous inflammatory disease in transgenic rats expressing HLA-B27 and human beta 2m: an animal model of HLA-B27-associated human disorders. Cell. 1990; 63: 1099-1112.
- Mullins JJ, Peters J, Ganten D: Fulminant hypertension in transgenic rats harbouring the mouse Ren-2 gene. Nature 1990; 344: 541-544.
- Lippincott-Schwartz J, Patterson GH: Development and use of fluorescent protein markers in living cells. Science 2003; 300: 87-91.
- 5) Inoue H, Ohsawa I, Murakami T, Kimura A, Hakamata Y, Sato Y, Kaneko T, Takahashi M, Okada T, Ozawa K, Francis J, Leone P, Kobayashi E: Development of new inbred transgenic strains of rats with LacZ or GFP. Biochem Biophys Res Commun 2005; 329: 288-295.
- Kulbatski I, Mothe AJ, Keating A, Hakamata Y, Kobayashi E, Tator CH: Oligodendrocytes and radial glia derived from adult rat spinal cord progenitors: morphological and immunocytochemical characterization. J Histochem Cytochem. 2007; 55: 209-222.
- Francis JS, Olariu A, Kobayashi E, Leone P: GFP-transgenic Lewis rats as a cell source for oligodendrocyte replacement. Exp Neurol. 2007; 205: 177-189.
- Kimura A, Ohmori T, Ohkawa R, Madoiwa S, Mimuro J, Murakami T, Kobayashi E, Hoshino Y, Yatomi Y, Sakata Y: Essential roles of sphingosine 1-phosphate/1P1 receptor axis in the migration of neural stem cells toward a site of spinal cord injury. Stem Cells 2007; 25: 115-124.
- Sato Y, Igarashi Y, Hakamata Y, Murakami T, Kaneko T, Takahashi M, Seo N, Kobayashi E: Establishment of Alb-DsRed2 transgenic rat for liver regeneration research. Biochem Biophys Res Commun 2003; 311: 478-481.

- Sato Y, Endo H, Ajiki T, Hakamata Y, Okada T, Murakami T, Kobayashi E: Establishment of Cre/LoxP recombination system in transgenic rats. Biochem Biophys Res Commun 2004; 319: 1197-1202.
- Hakamata Y, Murakami T, Kobayashi E: "Firefly rats" as an organ/cellular source for long-term in vivo bioluminescent imaging. Transplantation 2006; 81: 1179-1184.
- Hara M, Murakami T, Kobayashi E: In vivo bioimaging using photogenic rats: fate of injected bone marrow-derived mesenchymal stromal cells. J Autoimmun 2008; 30:163-171.
- 13) Park IH, Zhao R, West JA, Yabuuchi A, Huo H, Ince TA, Lerou PH, Lensch MW, Daley GQ: Reprogramming of human somatic cells to pluripotency with defined factors. Nature 2008; 451: 141-146.
- 14) Poh KK, Sperry E, Young RG, Freyman T, Barringhaus KG, Thompson CA: Repeated direct endomyocardial transplantation of allogeneic mesenchymal stem cells: safety of a high dose, "off-the-shelf", cellular cardiomyoplasty strategy. Int J Cardiol 2007; 117: 360-364.
- Miyawaki A: Innovations in the imaging of brain functions using fluorescent proteins. Neuron 2005; 48: 189-199.
- 16) Paulmurugan R, Umezawa Y, Gambhir SS: Noninvasive imaging of protein-protein interactions in living subjects by using reporter protein complementation and reconstitution strategies. Proc Natl Acad Sci U S A. 2002; 99: 15608-15613.
- Ozawa T: Designing split reporter proteins for analytical tools.
 Anal Chim Acta 2006; 556: 58-68.

悪性黒色腫の転写修飾による免疫学的感受性の増強

自治医科大学分子病態治療研究をンター・臓器置換研究部 村上 孝

【はじめに】

メラノーマに対する「がん抗原」の発見以来、 がんワク チン療法に関する多くの臨床試験がなされている. しか しながら、米国がん研究所Rosenbergらの報告では、メ ラノーマ患者を中心としたワクチン療法の臨床的応答性 がわずか2.6%でしかなく1),がんワクチン療法の限界す ら暗示されている. その一方で、この報告はこれまでの 腫瘍免疫学の多くの蓄積を踏まえ、がんワクチン療法の 改善すべきポイントを宿主免疫と腫瘍側因子の両面から アプローチすることの必要性が唱えられている2). 特に、 宿主免疫側の因子として、腫瘍特異的細胞傷害性T細胞 (CTL) が効率よく生成されることに加え、①腫瘍抗原を 効率よく認識し、②腫瘍部位に効率よく供給され、③そ の局所で活性化されることが挙げられている. また、担 がん宿主に生じる制御性T細胞や未熟骨髄細胞集団が 腫瘍特異的CTLを抑制するため、これらの制御も重要 である.

メラノーマは、他のがん細胞と同様、多くの遺伝子異常の蓄積とともに、遺伝子発現の抑制を伴い、がん細胞自身が宿主免疫の攻撃から回避できる機構(治療抵抗性)と密接に関連している³⁾. 腫瘍抗原やMHC class I抗原の発現の欠落に加え、アポトーシスに関連する実行分子の発現抑制により、腫瘍細胞自身がアポトーシス抵抗性を獲得している. したがって、腫瘍を免疫学的に効率よく排除するためには、腫瘍細胞自身を「細胞死」に対して感受性を持たせる必要がある. 最近注目されている抗がん薬(分子標的薬)の一つであるヒストン脱アセチル化阻害剤は、がん細胞に対して選択的に作用し、がん細胞の異常な転写抑制を改善することができる^{4,5)}. 本稿では、ヒストン脱アセチル化阻害剤によるメラノーマの遺伝

子発現修飾によるアポトーシス感受性の増強から養子免疫療法への応用について紹介したい.

【ヒストン脱アセチル化による遺伝子発現の抑制】

タンパク質の翻訳後修飾としてアセチル化と脱アセチル化が知られている。これまでのタンパク質のアセチル化の研究は、DNA結合制御タンパク質であるヒストンを中心に報告されている。ヒストンが高度にアセチル化されている染色体領域では、遺伝子の転写が活発に行われている領域に一致し、ヒストンのアセチル化は遺伝子発現を「正」に制御していると考えられている。反対に、ヒストンが脱アセチル化(低アセチル化)されることにより遺伝子発現は「負」に制御されると考えられている。

最近、ヒストンをアセチル化する酵素、ヒストンアセチル基転移酵素 (Histone Acetyltransferase; HAT) の活性を有する CREB binding protein (CBP) やp300-CBP-associated factor (PCAF) が、ヒストンのみならず、癌抑制遺伝子p53をアセチル化することが報告された 6,7 . p53のアセチル化により、その転写因子としての活性が増強され、下流にある増殖(細胞周期)抑制遺伝子やアポトーシス関連遺伝子等の発現が誘導される 6,7 .

p53と並んで有名ながん抑制遺伝子である網膜芽腫タンパク質 (pRB) が知られている.この pRB による細胞増殖制御は、pRB が増殖関連遺伝子近傍に結合し、その標的遺伝子の転写を抑制するためであることが判っていたが、遺伝子近傍に結合した後、pRB がどのような機構で転写抑制を行うのかは不明であった.最近、ヒストン脱アセチル化酵素 (Histone Deacetylase; HDAC) がpRB に結合していることが報告され⁸、HADC がpRBを介して増殖関連遺伝子周囲のヒストンに近づき、pRBの結合領域周囲のヒストンを脱アセチル化(低アセチル化)することが示された.このヒストンの低アセチル化により、当該領域のDNAとヒストンの結合が強まり、増殖関連遺伝子の転写が抑制されると考えられている.現在までに、複数のヒストン脱アセチル化酵素の阻害剤に強力な細胞増殖抑制作用や分化誘導作用があることが明らか

106 (424) 医薬の門 2008

にされている(表 1) $^{4,5)}$. 従来までにないこの転写修飾作用が注目を集め、一部のHDAC阻害剤は新規制癌薬としての臨床試験が行われている。その中の1つであるFK228 (depsipeptide、FR901228) は既に皮膚 2 T細胞リンフォーマの臨床試験において非常に良好な治療効果を挙げている 9 .

【HDAC阻害剤FK228の標的遺伝子とアポトーシス感受性の増強】

ヒトメラノーマ細胞においてもHDAC阻害剤FK228は 表1に準じた作用を示す。ヒトメラノーマ細胞における FK228の標的遺伝子の探索は、正常なメラノサイトとの 比較においてDNAマイクロアレイによって解析されてい る¹⁰⁾. 興味深いことに、メラノーマ発生や進展に関わる Ras-MAPKシグナル経路の制御因子Rap1がFK228の 標的遺伝子の一つとして含まれ、FK228を介したRap1 の遺伝子発現回復を介してメラノーマ細胞の増殖を制御 することが分った10). さらに、FK228はメラノーマ抗原と して知られるgp100/pmelの遺伝子発現を10~15倍も 増幅することができる. われわれはこの実験結果を基に 一つの仮説を立てた、すなわち、メラノーマにおける抗 原性や前述のアポトーシス感受性を増強することによっ て、メラノーマの免疫学的排除を効率よく行えるかもしれ ない、という考えである. この仮説を実証するために、 マウスメラノーマB16-F10細胞を用いたモデル実験を 行った¹¹⁾. マウスB16細胞では、HADC阻害剤FK228 のED50は5nM程度であり、p21Waf1/Cip1レベルの上昇とと もに細胞周期の停止を誘導し、caspase-3/7活性を有意 に増強した. この条件下では、B16細胞の表面にFasが 強く誘導され、Fasリガンドの添加によって顕著な細胞死 が誘導された(図1a~c). さらに、gp100を特異的に認 識するT細胞受容体(TCR)を保有するPmelトランス ジェニック(Tg)・マウスに由来するCD8⁺T細胞をエ フェクターとしたCTLアッセイにおいてもFK228の存在 化では顕著なB16細胞の殺傷効果が得られた(図1d). これらのin vitroの実験結果は、メラノーマに対する免

表1 ヒストン脱アセチル化阻害剤の制がん効果

細胞の増殖抑制

核内受容体を介した細胞分化の促進 p21^{Wat1/Cip1}の誘導,G1停止,細胞分化誘導 DNAメチルトランスフェラーゼとの協調作用によるがん抑制 遺伝子の再活性化 テロメラーゼ遺伝子の発現抑制

アポトーシスの誘導

ミトコンドリア依存的アポトーシスの活性化 Fas 受容体系を仲介したアポトーシスの感受性増強

その他の機能

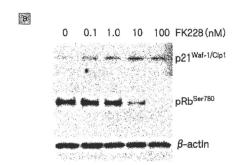
がん化シグナルの修飾 微小管機能の修飾 MHC抗原分子の細胞表面への誘導(免疫認識の向上) 血管新生の抑制(HIF-1α発現抑制, VEGF発現抑制)

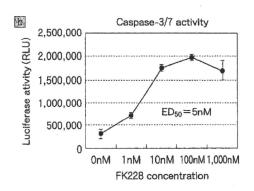
疫学的感受性の増強にHADC阻害剤FK228の利用が有効であることを示唆している.

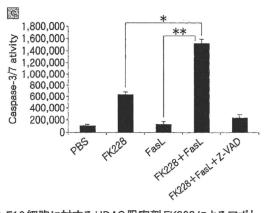
【HDAC阻害剤FK228の前処置と抗原特異的T細胞養子移入】

メラノーマに対する養子免疫療法では、メラノーマに 浸潤しているCTLを患者体内からex vivoに取り出し、 IL-2存在下で抗原特異的CTLを一定期間培養し、それ を同一個体内に戻す細胞治療である^{1,2)}. Rosenbergら の報告では、メラノーマに対する養子免疫療法の臨床的 応答性はプロトコールの改善によるところもあるが、現在 50%にも達している¹²⁾. 養子移入するCTLを強化する ための遺伝子修飾を加えることも可能であり、このことが 治療成績の向上にも効いているように見える.

このような観点から養子免疫療法にHADC阻害剤 FK228の前処置は有効な手段となり得るかもしれない. 現時点では、養子移入前の患者処置としてcyclophosphamide (60 mg/kg/day: 2 日間)とfludarabine ($25 \text{mg/m}^2: 5 \text{日間}$)の投与が行われ、 $2 \sim 3 \text{日間}$ のみIL- $2 (7.2 \times 10^5 \text{IU/kg}: 8 時間おき)が補充されている<math>^{12}$. このような前処置は養子移入されるCTLの生存環境を整えるために必要とされている(間質組織から供与されるIL-15







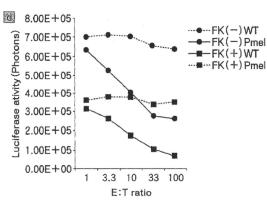


図1 B16-F10細胞に対するHDAC 阻害剤 FK228によるアポトーシス感受性の増強

- 図: HDAC 阻害剤 FK228 による用量依存的な P21 Wef1/Clp1 の誘導と pRB の脱リン酸化.
- 図: FK228 による用量依存的な caspase-3/7 の活性化.
- 図: FK228 (5nM) における Fas リガンドとの B16-F10 細胞に対するアポトーシスの相乗作用.
 - *p < 0.05, **p < 0.001 (Student's t-test).

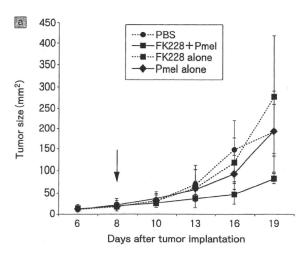
圏: メラノーマ抗原 gp100 特異的 CTL (Pmel-Tg マウス由来) による FK228 (5nM) との協調作用。 B16-F10 細胞にルシフェラーゼを安定導入した B16-F10-luc 細胞を標的とし、ルシフェラーゼ活性を指標に細胞傷害活性を評価した。

やIL-7等が移入CTLの生存を支持する). われわれの 視点はこれとは異なり、腫瘍細胞自身の感受性を修飾す るというものである. 実際、C57BL/6マウスにB16-F10 細胞を接種した担がんマウスにおいて、FK228(2mg/ kg/day)を3日間前処置したマウスにPmel-Tgマウス由 来の活性化リンパ球(CTL)を養子移入すると、FK228前 処置群で有意な腫瘍増大抑制効果を得ることができる (図2a). 同様の効果は転移性腫瘍についても観察され た(図2b). これらの結果は、HDAC阻害剤FK228の利 用はメラノーマ細胞の免疫学的な感受性を回復させ、が ん免疫療法における抗がん薬の併用や前処置として有効 な手段となり得るものと考えられる.

【おわりに】

移入細胞を大量に培養する技術や相応の設備が必要とされる養子免疫療法は高度にオーダーメイド化された治療方法であり、現在の腫瘍学的治療の基準に当てはまらないことが大きな欠点とされている。しかし、これまでに蓄積された腫瘍学の知識は養子免疫移入療法にも応用されている。移入すべきCTLの環境を整え、腫瘍自身の免疫学的感受性を持たせる治療方法は「宿主側因子」と「腫瘍側因子」を両面から捉えたものと云えよう。「腫瘍側因子」を特異的に抑制する分子標的化合物のスク

108 (426) 医薬の門 2008



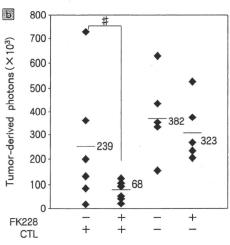


図2 B16-F10細胞の担癌マウスにおけるHDAC 阻害剤 FK228 前処置と養子免疫療法

- 園: C57BL/6マウスにB16-F10細胞を接種した担癌マウスにおいて、FK228(2mg/kg/day)を3日間前処置し、Pmel-Tgマウス由来の活性化CTLを養子移入した。
 矢印: CTLを養子移入日、mean ± SD、n = 5 ~ 6/群
- 國:B16-F10-luc細胞の肺転移モデルにおけるFK228 (2mg/kg/day)とPmel-CTLの相乗的な治療効果. 腫瘍由来のルシフェラーゼ 活性を指標に評価.

#: p < 0.01 (Kruskal-Wallis test, $n = 6 \sim 7$).

リーニングが進みつつある現在、CTL活性を促進する 化合物も次々と明らかにされてくるものと思われる。した がって、がん分子標的化合物を用いた相加・相乗的な免 疫細胞療法は次世代型のがん治療戦略の一つとなろう。

【謝辞】

本研究は、日本学術振興会「科学研究費補助金基盤研究(C)」、 並びに厚生労働省科学研究費補助金「創薬基盤推進研究事業(生 物資源研究)」によって成されたものである.

文 献

- Rosenberg SA, Yang JC, Restifo NP: Cancer immunotherapy: moving beyond current vaccines. Nat Med 2004; 10: 909-15.
- 2) Rosenberg SA, Dudley ME: Cancer regression in patients with metastatic melanoma after the transfer of autologous antitumor lymphocytes. Proc Natl Acad Sci USA 2004; 101 Suppl 2: 14639-45.
- 3) Herman JG, Baylin SB: Gene silencing in cancer in association with promoter hypermethylation. N Engl J Med 2003; 349:2042-54.
- 4) Marks P, Rifkind RA, Richon VM, et al: Histone deacetylases and cancer: causes and therapies. Nat Rev Cancer 2001;1:194-202.
- 5) Minucci S, Pelicci PG: Histone deacetylase inhibitors and the promise of epigenetic (and more) treatments for cancer. Nat Rev Cancer 2006;6:38-51.
- 6) Sykes SM, Mellert HS, Holbert MA, et al: Acetylation of the p53 DNA-binding domain regulates apoptosis induction. Mol Cell 2006; 24:841-51.
- 7) Tang Y, Luo J, Zhang W, et al: Tip60-dependent acetylation of p53 modulates the decision between cell-cycle arrest and apoptosis. Mol Cell 2006; 24:827-39.

Vol.48 No.4 (427) 109

研究会レポート

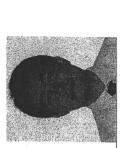
- 8) Siddiqui H, Solomon DA, Gunawardena RW, et al: Histone deacetylation of RB-responsive promoters: requisite for specific gene repression but dispensable for cell cycle inhibition. Mol Cell Biol 2003; 23:7719-31.
- 9) Masuoka Y, Shindoh N, Inamura N: Histone deacety-lase inhibitors from microorganisms: the Astellas experience. Prog Drug Res 2008;66:335, 337-59.
- 10) Kobayashi Y, Ohtsuki M, Murakami T, et al: Histone deacetylase inhibitor FK228 suppresses the Ras-MAP kinase signaling pathway by upregulating Rap1 and induces apoptosis in malignant melanoma. Oncogene 2006; 25:512-24.
- 11) Murakami T, Sato A, Chun NA, et al: Transcriptional modulation using HDACi depsipeptide promotes immune cell-mediated tumor destruction of murine B16 melanoma. J Invest Dermatol 2008; 128: 1506-16.
- 12) Rosenberg SA, Restifo NP, Yang JC, et al: Adoptive cell transfer: a clinical path to effective cancer immunotherapy. Nat Rev Cancer 2008;8:299-308.

Ш TA **ラット・シスデ** UP-to-D 癌細胞の動態観察に貢献する 再生医療研究用幹細胞や color-engin eered Technology

小林 英司

自治医科大学分子病態治療研究センター臓器置換研究部 教授 /自治医科大学実験医学センター センター長 1995年 自治医科大学 臨床薬理学教室 助教授、同大学外科 助教授(兼任) 2001年 同大学 分子病態治療研究センター 教授、同大学外科 教授(兼任) 2003年 同大学 実験医学センター センター長 置

移植免疫、再生医学、パイオエシックス(自然科学全般にわたる生命倫理) 專政分野



本十

自治医科大学分子病態治療研究センター臓器置換研究部 准教授

吉田光昭 教授) (東京大学医科学研究所 細胞化学研究部 日本学術振興会特別研究員(がん) 平成 4年3月 群馬大学医学部医学科 卒業 7年4月 崖

東京大学大学院医学系研究科 修了(医学博士) 自治医科大学付属病院 臨床助手(皮膚科) 自治医科大学 助手(皮膚科) 平成 9年3月 月 平成10年4月 日 平成12年4月 日

平成19年4月 自治医科大学 准教授(分子病態治療研究センター臓器置換研究部) 平成15年9月 自治医科大学 講師(分子病態治療研究センター臓器置換研究部) Research Fellow, National Cancer Institute, Bethesda, MD 平成13年12月

職傷学、免格学、バイナイメージング

専攻分野

はじめに

解明に貢献している。このような臓器の ヒトゲノム科学の進展はヒトの病態解 明や新しい診断・治療方法に大きな変 革をもたらしている。これらのゲノム情報 はマウスやラットのゲノム情報と比較され、 それぞれ臓器固有の発生や分化機構の 発生・分化機構の理解に基づいた傷害 職器の再生医療技術の確立は21世紀 における先端医科学研究の重要な課題 となっている。特に、体性幹細胞を用い た様々な細胞系譜への分化誘導は、細 胞・臓器移植の基盤技術と相まって安 全で有望な再生医療の方法と考えられ ている。特に、ヒト臓器の発生・分化機 権の理解に基づいた再生医療技術を考 案し開発することは現在の「再生医学 研究」の中心であろう。しかし、我々は、 実際の医療応用への視点から「医療技 術を模倣できる動物資源」に注目し、移 植・再生医療のためのモデル動物開発 を行なってきた。本稿では、我々がこれ まで行なってきた [color-engineered rat システムとバイオイメージングについ て紹介したい。

2. 蛍光タンパク質を発現するトラン スジェニックテット・システム

べて体サイズが10倍も大きいため、心 のカテーテル挿入など、外科的手技を含 む臨床医学で利用される種々の技術を 実験動物としてのラットは、マウスと比 応用することができる。実験動物とじて 特に薬理学や脳神経科学の分野におけ 臓や肝臓などの臓器移植や特定部位へ の歴史では、マウスよりもラットの方が早く 医学研究に応用されてきた背景があり、 るラットの実験データは現在の臨床医学 1980年代に大きく進歩した組み換え

研究分野に利用されている。

み合わせにより、細胞機能を「色分け」

表1. Color-engineered rat colonies

Technology UP-to-DATE

Rat strain	Promoter	Marker
Wistar	CAGGSa	GFPb
Lewis	CAGGS	GFP
Lewis	Albumin	GFP
Dark Agouty	CAGGS	LacZ (b-garactosidase)
Lewis	ROSA26	LacZ (b-garactosidase)
Wistar	Albumin	DsRed2c
Wistar	CAGGS	DsRed2, GFP (in Cre/LoxP system)
Lewis	ROSA26	Luciferased
Fischer 344e	CAGGS	GFP
Lewis	ROSA26	DsRed monomer

a, cytomegalovirus enhancer/chicken b-action promoter; b, green fluorescrit protrein (Aequorea votorial; c. DsRed (Discosoma); d, luciferase from the firefly (Phothrus pyzalis); e. This line was Developed by Dr. Takahiro Ochiya (Natinal Cancer Center Research Institute, Lokyo, Japani).

傷害を受けた組織の機能的回復は、

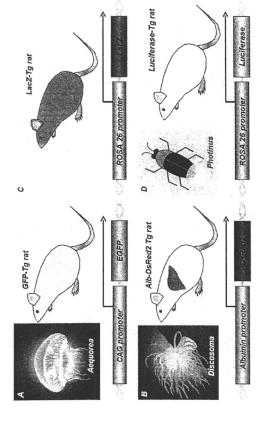
することができる。 (cDNA)をマウス受精卵に導入・発現さ 代初めになる[2-3]。1990年代後半にな DNA 技術により、単離した特定遺伝子 せることが可能になり、トランスジェニック (Tg)・マウスが誕生した[1]。その後、 マウスES細胞における相同組み換え技 様々な遺伝子欠損マウスが誕生し、現 在の医科学研究を席巻している。ラット にトランスジェニック技術が応用されたの はマウスに遅れること約10年、1990年 ると、発光クラゲに由米するGreen Fluorescent Protein (GFP) の利用が GFP-Tgマウスが報告された[4]。生き 細胞動態観察のみならず細胞内タンパグ 質の挙動を観察する 「biological light probe』として現代のパイオサイエンスを 術を利用した遺伝子破壊が可能になり、 普及し始め、GFP を全身性に発現する た細胞を励起光下で観察できる GFP は、 支える重要なアイテムになっている。赤 橙色や青色などの蛍光タンパク質との組

現在の再生医学研究が目指す究極の ゴールである。特定の機能を担う細胞を 調製し、移植する方法が最も単純な手 段である。とりわけ、移植した細胞や組 織の運命を追跡することは応用的な医療 技術への方向性を決める重要な律選段 降となるため、細胞機能を「色分け」し、

移植細胞が機能回復にどのように関与 するか評価できるシステムは極めて重要 な意味をもつ。近年の光学的技術の進 の利用価値は高く、移植された細胞や および (表1)、再生医学を含む種々の 歩により、生体イメージング技術も著しく 発展した。その結果、応用的なバイオ 研究を目指す研究者にとって、種々のバ イオプロープを持つトランスジェニックラット 組織の動態を「光」として追跡できるよ **らになった。 臓器移植研究に始まったトラ** バスジェニックラット開発も、約10種類に

34

Technology UP-to-DATE



代表的なトランスジェニック・ラットの系統 N T

- (A) CAG/GFP-LEW トランスジェニック・ラット。
- B) Alb-DaRed2 トランスジェニック・ラット(マウスアルブミンプロモーターによる DaRed2 の肝特異的発現)。 (C) ROSA26/LacZ-LEW トランスジェニック・ラット。 (D) D. ルシフェリン(基質)存在下で全身がルシフェラーゼ発光する ROSA26/LucJ-EW トランスジェニック・ラット。

3. ダブル TB テット作戦とその応⊠

GFP は LacZ と並ぶ細胞マーカーの

よる評価に優れているが、GFP-Tg ラット は染色操作が不要であり、リンパ状等で 代表である (図1)。LacZ-Tg ラットの組 撤はB-gal 染色による組織学標本作製に はフローサイトメトリー解析などの細胞単 位での評価にも成力を発揮する [5, 6]。 その他にも我々は肝特異的にDsRed (赤 橙色)を発現するラットや Cre/LoxP (DsRed2/GFP) ラットなども開発している [7]。このような蛍光タンパク質の検出には 助起光源を必要とするが、発光タンパク 質の「光」を指標に評価する系もある。

香形種を発生しないことが挙げられる 光 (フォトン)を発生し、目的とする細胞 や組織における遺伝子発現をリアルタイム に追跡することを可能にする。生体を透 過する最適な光 (600nm) が得られる (ル ミネセンス法)は検出感度と定量性の点 で非常に有利である。この発光原理に 基づく場合は生体に「基質」を投与する ことで細胞内エネルギー (ATP) に依存 した光を捕捉することができ、細胞生存と トン数を指標に定量的に観察することが できる。また、生体に与える身襲も嵌小 限であるため、再生移植治療モデルの 共役した画像イメージが得られる。即ち、 個体内における特徴的な生物現象をフォ

骨髄に由来する間葉系幹細胞 (nesenchymal stem cell: MSC) は、そ の分化能に加え、分離・培養が容易で あるため、再生医療への応用が期待さ の傷害臓器(癌部を含む)に蓄積する 性質があり、その利点を活かした研究が 行われている。この利点は、ES細胞の 利用とは異なり、繰り返しMSCを用いて 視点から開発されたのが、 基質 (ルシフェ リン)存在下で全身が発光するルシフェ れている。さらに、投与されたMSCは種々 ラーゼ・Tgラットである (図1 D) [8]。 高感度で組織透過性と定量性に優れる

このような再生医療への応用を試験 する目的では、ルシフェラーゼ・Tg ラット

長期的な観察に優れている。このような

例えば、ホタル由来のルシフェラーゼは、

図2 ルンフェラーゼ / LacZ-ダブル・トランスジェニック・ラットに由来する間繁性幹細胞の傷癌部位への集積

筋肉内接種

- (4) ラット下錠筋を cardidroxin 不審書し、24時間後にルジフェラーゼ/LaoCz ダブルトランスジェニッケ・ヴァトロ曲来するMSC (1x106個) を大腿動脈(上段) もしくは筋肉丸 (下段) に投籍した。大腿動脈結由のMSC 投与により傷害された下砂筋肉に強いルジフェラーゼ 舌性が観察される。
- (B) (A) における個体の組織解本 (MSC接種後10日目)をひら引送のた。(400倍)、 (C) (A) に同様にラッド下設部をの出始しなかれて確実し、サヤ大量のMSC (G A X 106億)を大腿動脈を担て後籍した。稼働された下設形的 へのMSC 業態とたらに、末路与組=を沿過してMSC は、再語形し一油在に指に整理する (将服後30分のイメージ階級)、

を起点としたバイオプローブの組み合わ 報をもたらす。例えば、ルシフェラーゼ -TgラットとLacZ-Tgラットを交配した

せは様々な再生医学研究に重要な情

することができた (図2 A、B) [11]。こ れらの結果は、MSCのような幹細胞を臓 器特異的に移植する手段として経動脈 的供給が優れていることを示唆している。 その一方で、過剰のMSCは末梢毛細 血管を通過し、再循環レー過性に肺に 潜税する事実も明らかになり (図2C)、 医療応用においてはMSC投与による副 作用 (肺塞栓) の発現にも注意する必 要があろう。

> hemizygousdoubleTg ラットをは「時間 - 空間的解析」が可能な系といえる。す なわち、この系ではルシフェラーゼ発光と B-gal 染色が可能となる[11]。 ラット下肢 筋肉をCardiotoxin で傷害し、上記の ダブル Tg ラット由来の MSC を局所注射 し、局部でのMSCの存在は観察される

4. 権の刑存セトメーツング

ものの、傷害を受けた下肢筋肉全体をカ

に、ラ小下肢を支配する大腿動脈経由 でカテーテル法を用いて MSC を導入す バーする程のものではなかった。対照的

ると、効率よく下肢全体に MSC を供給

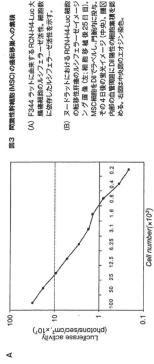
値し、その臘囚形成能や転移能などを 従来までのがん細胞を使用した動物実 験では、移植可能ながん細胞株を移

時間経過に応じて屠殺し、解剖する必 要があった。 腫区動態の可視化は、19 90年代のが人研究の中で重要な課題の それらの動態観察がリアルタイムになされ るようになった。特に、癌転移を実験的 に評価するためには、「転移」という事 が不可欠である。現在、希細胞に遺伝 -つであったが、2000年以降では種々 袋の性格から、「モデル動物」での評価 (GFP やルシフェラーゼ)の蛍光や発光 に魅力的な手段となっている。我々の研 究室では、絡の生体内イメージングには 後者のルシフェラーゼをプローブとした系 のバイオプローブや、酸器の開発が消み、 子として安定に導入されたバイオプローブ を小動物の体内で追跡する方法は非常

36

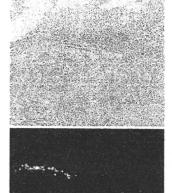


Technology UP-to-DATE



Ш

(A) F344 ラットに由来するRCN-H4-Luc 大 腸痛細胞のルシフェラーゼ活性。細胞数 (B) ヌードラットにおけるRCN-H4-Luc 街粉 その4日後の蛍光イメージ (中央)。 腫図 の転移性肝痛のルシフェリーゼ・イメーシ ング画像(左; 細胞移植後25日目) MSC植物をDii でレベッフ、Fil 脈内に故与 に依存したルシフェラーゼ活性を示す。



関して、乳癌の例では「転移を促進する」 治療応用に関してはまだ十分な研究が必 という結果が報告されている[13]ため、

> を用いている。例えば、F344由来ラット 大腸癌細胞株にルシフェラーゼを組み 込んだ RCN-H4 Luc 細胞 [12] をラット門 脈内に注射し、転移性肝癌モデルを作 するだけで容易に観察することができる すると、痛の進展の様子が基質を投与 (図3)。これを先に述べた「MSC が縮 部位に集積する」という性質に応用する 展してから蛍光ラベルされた MSC を投 与すると、縮部に一致した MSC の集積 が観察される (図3B) [11]。MSCの 縮治療への応用に関してはインターフェロ ンなどの順区免疫を認起するサイトカイン を組み合わせた治療などが考案されてい るが、 癌の 進展における MSC の役割に

ルシフェラーゼを用いた実験系の優れ

たところは、このような生体内での経時的 なルミネセンス・イメージング観察のみなら ず、試験管内における評価を同時に行な える点にある。細胞内の ATP レベルを 反映した「光」は、細胞生存と非常によ く比例するため、ルシフェラーゼでラベル されたがん細胞は、腫囚特異的リンパ球 や各種抗がん剤・化合物による細胞傷 いわゆるセミ・ハイスループット型のスク 害を迅速かつ簡便に評価することができ、 ルーニング系としても活用することがでる。

ことができる。格臘が一定の大きさに進

始めた。1980年代後半に米国のがん創 薬研究を促進する目的で作成された計画 (NCI) 60 anticancer drug screen」が ある。これはヒトがん細胞株60種類につ 器積している[15]。この「NCI60 細胞パ 現在、我々はバイオイメージング用のヒト がん細胞株のライブラリー化にも取り組み The US National Cancer Institute 管内で検索する試験として開始された [14]。2000 年以降のヒトゲノム解析研究 発現パターンと化合物・薬物感受性の 比較試験等が実施され、多くの情報が いて種々の化合物・薬物感受性を試験 の進展に伴い、それら細胞株の遺伝子 ネル」は現在ではゲノム創薬の参考資料 として多くの施設で利用されている。しか

しながら、このパネルに由来する細胞を 態解析に応用しきれていない。また、マ ウスー個体による経時的評価系が研究 メージング用資源に改良・充実させるに 用いたモデル動物個体内での評価はあま NCI60 パネルにリストされているがん細胞 をそのままSCID マウス体内での細胞動 機関によりまちまちで、統一されてこなから た欠点も指摘できる。したがって、これま で科学的に評価されているがA細胞株イ り進んでいない。その主な理由は、 より、抗体医薬を含めた新規化合物の個 体にスクリーニングが可能になり、創薬研 究が促進されるものと考えている。

5. スイギイメーツングの風区

バイオプローグを用いた細胞レベルで 現象を分子間同士の相互作用を「光」 として捉えることに成功している[12]。し によって、細胞の運命を生きた個体内で の研究は、これまで観察されてきた生物 を試験管内での実験結果や細胞培養系 追跡しうる優れた方法が利用できるように なった現在では、分子動態を生きた個体 かしながら、生体内で起こる複雑な事象 のみで捉えることでは決して十分とはいえ ない。革新的なイメージング技術の進歩 内の細胞拳動として機能的に捉えること が必要になりつつある。再生医学研究や 縮転移に限らず、生命現象の中には生き た個体内でしか観察できない事象も多 い。とりわけ、細胞治療を基盤とした再 生医学研究でのバイオイメージング技法 の価値は極めて高いといえる。その意味 において、我々が開発してきた Tg ラット は広く生命科学の分野における有効な細 胞ソースとして利用され、 革新的な研究 に貢献できることを願って止まない。

Genetic transformation of mouse embryos by microinjection of purified DNA. Proc Natl Acad Sci U S A. 1980, 77: 7380-7384. () Gordon JW. Scangos GA, Plotkin DJ, et al.

Hannner RE, Maika SD, Richardson JA, et al.

ic rats expressing HLA-B27 and associated human disorders. Cell. human beta 2nx an animal model of HLA-B27-associated Mullins JJ, Peters J, Ganten D. 1990, 63: 1099-1112.

Pulminant hyportension in transgenic rats harbouring the mouse Ren-2 gene. Nature 1990; 344; 541-554.

Green auce' as a source of abiquitous green cells. FEBS Lett. 1997, 407; 313-319. Okabe M, Ikawa M, Kominami K, et al-

Development of new inbred transpenie strains of rats with LacZ or GFP. Biochem Biophys Res Commun 2005; 229, 288-295.

© Murakanii T, Kobaynshi E. I loove H. Ohsawa I, Murakami T. et al:

Color-engineered rats and luminescent LacZ imaging: a new platform to visualize biological processes. J Biomed Opt2005; 10: 41204 (1-10). ?) Sato Y, Endo H, Ajiki T. Hakamata Y, Okada T. Murakami T. Kobuyashi E.

"Firefly rats" as an organ/cellular source for long-term in vivo bioli Establishmeut of Cre/LoxP recombination system in transgenic rats. Biochem Biophys Res Commun 2004; 319: 1197-1202.

Hakamata Y., Murakami T, Kobayashi E.

Transplantation 2006; 81: 1179-1184.

Park IH. Zhao R. West JA, Yabunchi A. Huo H. Ince TA. Lerou PH, Leasch MW. Daley GQ. Reprogramming of human somatic

Nature. 2008; 451: 141-146. (i) Poh KK, Sperry E, Young RG, Preyman T, Barringhaus KG, Thompson CA. Repeated direct endomyocardial transplantation of allogenoic mesenchyma! cells: safety of a high dose, "off-the-shelf", cellular cardiomyoplasty strategy.

In vivo bioiunaging using photogenic rats. fate of injected bone marrow-derived mesenchymal stromal cells. Hara M, Murakami T, Kobayashi E. lut J Cardiol. 2007; 117: 360-364. nun 2008; 30: 163-17L

In vivo luminescent imaging of cyclosporine A-r 12) Ohsawa I, Murakami T, Uemoto S, Kobayashi E.

ution 2006; 81: 1558-1567.

Monks A, Scudiero D. Skehau P, Shoemaker R, Paull K, Vistica D, Hose C, 1.3 Kamouth AE, Dash AB, Vo AP, et al. Mesenchymal stem cells within tunour stroma promote breast cancer me Nature. 2007, 449: 557-563. 4) Langley J, Crouise P, Vaigro-Wolff A, et al

Feasibility of a high-flux anticancer drug screen using a diverse panel of cultured 16) Ozawa T. Designing split reporter proteins for analytical tools. Anal Chim Acta. 2006; 556: 58-68. 15) Pinkel D. Caucer cells, chemotherapy and gene chisters. I Nat Cancer Inst 1991; 83: 757-766. Nat Genet, 2000; 24: 208-209. human tumor cell lines.

38



10.1117/2.1200912.002501

Bioluminescent imaging and organ-specific metastasis of human cancer cells

Takashi Murakami and Nicole Chun

Applications of high-frequency ultrasound imaging will help reveal the nature of cancer spread.

Cancer metastasis is the end result of a complex series of biological events that lead to the formation of clinically significant secondary tumors at distant sites. Clinical evidence demonstrates that such sites are not randomly located, and certain malignant tumors show a tendency to develop metastases in specific organs (e.g., brain, liver, and lungs). However, an appropriate animal model to characterize the hematogenous nature (i.e., originating in blood) of transplantable human-cancer-cell lines is not available for metastatic cells, while profiling data of hematogenous metastasis has not attracted sufficient scientific attention to improve understanding.

Recent advances in bioluminescent-imaging (BLI)2 technologies have facilitated quantitative analysis of cellular processes in vivo. BLI reporters have significant signal-to-noise ratios in mammalian tissues, and emitted-light signals can be quantified in intact animals using noninvasive assays. To obtain profiling data of the metastatic fate in human transplantable tumorcell lines, we have been generating a luciferase-expressing human-cancer-cell library (including melanoma, colon, breast, and prostate cancer) since mid-2007. (Luciferase is an enzyme present in the cells of bioluminescent organisms that produces light by catalyzing the oxidation of luciferin and adenosine triphosphate, ATP, a nucleotide found in the mitochondria of all plant and animal cells.) We created these cells using a retroviral gene-transfer technique. In the presence of D-luciferin, as few as 50 luciferase-transduced cells can be detected in vitro against the background's linear-dose-dependent output of light. Although expression levels among cell lines are not always the same, selected cells provide sufficient numbers of photons in vivo for real-time luminescent imaging.

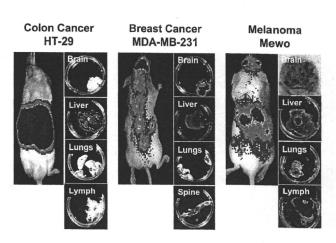


Figure 1. Representative metastatic images of human-cancer-cell lines in nonobese diabetic/severe combined-immunodeficiency mice. Luciferase-expressing cells were injected into the left cardiac ventricle under fine-ultrasonography guidance. In and ex vivo bioluminescence imaging was conducted for (left) HT-29 colon and (middle) MDA-MB-231 breast cancer, and (right) Mewo melanoma cells 30–40 days after tumor implantation. (right) Black dots in the brain represent metastasis of Mewo cells.

To date, cancer-cell injection into mice has been done easily through the tail vein. However, this route is not beneficial for systemic cell delivery because most of the sizable injected cells are trapped in the lung capillaries. To overcome this and systemically deliver cells via arteries, many scientists have blindly tried injections into the left ventricle (heart chamber). Even veteran technicians have blindly been injecting cells into a very narrow space in the mouse heart. However, high-resolution ultrasonography (US), developed specifically for small-animal imaging, now provides clear identification of areas of interest within the myocardial wall (i.e., of the heart muscle) and allows

Continued on next page





10.1117/2.1200912.002501 Page 2/2

precise, site-directed cell injection. Therefore, using fine-US guidance, we have successfully realized accurate and reproducible cardiac-cell injection into mice.

We have generated more than 30 luciferase-expressing human-cancer-cell lines using retroviral transduction. We inoculated these cells into the left cardiac ventricle of nonobese diabetic/severe combined-immunodeficiency (NOD/SCID) mice under fine-US guidance. BLI was conducted for each cell line, and representative organs (e.g., brain, liver, lungs, lymph nodes, bones, and gastrointestinal tract) were then inspected ex vivo. We observed cancer-cell-type-dependent metastasis to specific organs even in mice (beyond the species): see Figure 1. For instance, human colon-cancer HT-29 cells accumulated significantly in the liver of mice, while human-melanoma cell lines showed frequent metastasis to brain, lungs, and lymph nodes in the mouse model. For breast-cancer MDA-MB-231 cells, metastasis was observed to the bone in addition to the brain, lungs, and lymph nodes. Notably, reflecting the clinical features of melanoma, breast, and lung cancer, some cell lines showed preferential metastasis to the brain of mice.

Characteristics common to both tumor cells and normal stem cells appear to exist, referred to as *stemness*. The hallmark traits of stem cells—self-renewal and differentiation capacity—are reflected by the high proliferative capacity and phenotypic plasticity of tumor cells.³ Since the initial concept of cancer stem cells in solid tumors was established using NOD/SCID mice, we have had to employ animals to apply luciferase-expressing cell behavior to the theory of cancer stem cells. Our recent BLI-based experimentation suggests that a subpopulation of cancer stem cells is essential for organ-selective cancer metastasis.⁴

Approximately 10–20% of all systemic malignancies will eventually metastasize to the brain.⁵ Despite this high frequency of brain tumors, an accepted approach for effective treatment is still lacking. Accumulating clinical data suggest that the interaction between chemokines (proteins) and their receptors is a critical component for regulation of tumor progression and metastasis in many cancer types,¹ and that the CXCR4/CXCL12 pathway is involved.¹ However, the pathophysiology in brain metastasis is not fully understood because of the difficulty of creating appropriate animal models. Therefore, BLI combined with high-frequency US imaging should allow various preclinical studies at the tumor/normal-brain interface.

Combining cell resources with an appropriate animal model, our goal for the immediate future, will promote a better and more profound understanding of human-cancer-cell biology. Advances in optical imaging should provide a new platform to accelerate development of therapeutic strategies for human cancer.

This study was supported by a Health and Labor Science Research Grant from the Ministry of Health, Labor, and Welfare (Research on Biological Resources) and the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT) of Japan, and a grant from the 'Strategic Research Platform' for Private Universities: Matching Fund Subsidy from MEXT. We thank Masafumi Takahashi for helpful suggestions.

Author Information

Takashi Murakami and Nicole Chun Jichi Medical University Simotsuke, Japan

- 1. T. Murakami, A. R. Cardones, and S. T. Hwang, Chemokine receptors and melanoma metastasis, J. Dermatol. Sci. 36, pp. 71–78, 2004.
- R. S. Negrin and C. H. Contag, In vivo imaging using bioluminescence: a tool for probing graft-versus-host disease, Nat. Rev. Immunol. 6, pp. 484–490, 2006.
- 3. T. Reya, S. J. Morrison, M. F. Clarke, and I. L. Weissman, Stem cells, cancer, and cancer stem cells, Nature 414, pp. 105–111, 2001.
- 4. S. Yanagisawa, I. Kadouchi, K. Yokomori, M. Hirose, M. Hakozaki, H. Hojo, K. Maeda, E. Kobayashi, and T. Murakami, *Identification and metastatic potential of tumor-initiating cells in malignant rhabdoid tumor of the kidney*, Clin. Cancer Res. 5, pp. 3014–3022, 2009.
- 5. E. S. Nussbaum, H. R. Djalilian, K. H. Cho, and W. A. Hall, Brain metastases. Histology, multiplicity, surgery, and survival, Cancer 78, pp. 1781–1788, 1996.

© 2009 SPIE

Identification and Metastatic Potential of Tumor-Initiating Cells in Malignant Rhabdoid Tumor of the Kidney

Satohiko Yanagisawa,^{1,2} Ichiro Kadouchi,¹ Kinji Yokomori,² Masao Hirose,³ Michiyuki Hakozaki,⁴ Hiroshi Hojo,⁴ Kosaku Maeda,² Eiji Kobayashi,¹ and Takashi Murakami¹

Abstract

Purpose: Malignant rhabdoid tumor of the kidney (MRTK) is a rare and highly aggressive malignancy of infanthood. In an effort to delineate MRTK progression, we investigated the metastatic fate of some MRTK cells using xenotransplantation animal models and the tumor-initiating potential of CD133⁺ MRTK cells.

Experimental Design: We established two MRTK cell lines (JMU-RTK-1 and JMU-RTK-2) from patients with MRTK. We generated five luciferase-expressing MRTK cells for *in vivo* luminescent imaging and evaluated the metastatic fate in an orthotopic xenotransplantation model. Capacities of MRTK-initiating cells were examined in nonobese diabetic/severe combined immunodeficient mice after antibody-mediated magnetic bead sorting. Use of chemokine receptor CXCR4 expression as a metastatic marker was evaluated by flow cytometry and Western blotting.

Results: MRTK cell lines showed distant organ metastasis. JMU-RTK-1, JMU-RTK-2, and G401 cells showed considerable aggressiveness compared with SWT-1 and SWT-2 cells (*P* < 0.05). Moreover, as few as 1,000 CD133⁺ MRTK cells initiated tumor development in nonobese diabetic/severe combined immunodeficient mice by 21 days (60-100%) in all examined cell lines, although the same number of CD133⁺ MRTK cells could not form tumors (0%). Interestingly, the metastatic potential of the CD133⁺ population remained unaffected compared with a nonenriched population. The potential metastatic marker CXCR4 was expressed in CD133⁺ and CD133⁻ MRTK cells, and CD133⁻ cells seemed to play a cooperative role in terms of tumorigenicity and metastasis.

Conclusions: These results suggest that CD133⁺ cells may determine the metastatic fate of MRTK cells and that CD133⁻ cells may play an auxiliary role in tumor progression and metastasis.

There seem to be characteristics common to both tumor cells and normal stem cells in terms of what might be referred to as "stemness." The hallmark traits of stem cells—self-renewal and differentiation capacity—are reflected by the high proliferative capacity and phenotypic plasticity of tumor cells (1). Further-

more, malignant tumor cells often lack the terminal differentiation events present in normal cells. These parallels have given rise to the hypothesis that tumors often arise from undifferentiated stem or progenitor cells: Cancer cells can undergo progressive dedifferentiation during their development (1-3). Additionally, it has been proposed that cancer stem cells—a subpopulation of cancer cells possessing tumor-initiating capability—are derived from normal stem cells (1, 4). In fact, since the identification of leukemia-initiating cells, several initiating cells in solid tumors have also been identified for breast (5), brain (6), colon (7, 8), pancreas (9), and prostate cancer (10).

The malignant rhabdoid tumor (MRT) is a rare and highly aggressive malignancy of infanthood, which commonly develops in the kidney and central nervous system (11, 12). Significant progress in genetic studies has revealed that the majority of MRTs harbor biallelic inactivation of the chromatin-remodeling gene hSNF5/INI1 located in chromosome 22q11.2 (13, 14). However, MRT is resistant to most therapeutic regimens, and the overall survival rate of patients with MRT of the kidney does not exceed 25%. For example, only 8.8% of infants that were diagnosed before the age of 6 months were living 4 years after diagnosis (15). Recent clinical evidence has suggested that a high frequency of tumorinitiating cells in brain tumors (e.g., high-grade medulloblastoma) is significantly correlated with aggressiveness (6).

Authors' Affiliations: ¹Division of Bioimaging Sciences, Center for Molecular Medicine and ²Department of Pediatric Surgery, Jichi Medical University, Shimotsuke, Tochigi, Japan; ³Research, Education, and Management Center for Mental and Physical Health, Naruto University of Education, Tokushima, Japan; and ⁴First Department of Pathology, Fukushima Medical University School of Medicine, Fukushima, Japan

Received 8/27/08; revised 1/15/09; accepted 1/20/09; published Online First 4/21/09. Grant support: Health and Labour Science Research Grants from the Ministry of Health, Labor, and Welfare (Research on Biological Resources); the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) of Japan (project no. 20591326; 2008); and the "Strategic Research Platform" for Private Universities: matching fund subsidy from MEXT (T. Murakami).

The costs of publication of this article were defrayed in part by the payment of page charges. This article must therefore be hereby marked *advertisement* in accordance with 18 U.S.C. Section 1734 solely to indicate this fact.

Note: Supplementary data for this article are available at Clinical Cancer Research Online (http://clincancerres.aacrjournals.org/).

Requests for reprints: Takashi Murakami, Division of Organ Replacement Research, Center for Molecular Medicine, Jichi Medical University, 3311-1 Yakushiji, Shimotsuke, Tochigi 329-0498, Japan. Phone: 81-285-58-7446; Fax: 81-285-44-5365; E-mail: takmu@jichi.ac.jp

©2009 American Association for Cancer Research. doi:10.1158/1078-0432.CCR-08-2237

Translational Relevance

There is a great deal of clinical evidence supporting the aggressiveness of malignant rhabdoid tumor of the kidney (MRTK). However, an appropriate animal model to characterize the aggressive nature of transplantable MRTK cell lines has not been reported due to the rare malignancy. In this work, we showed the metastatic fate of some MRTK cells using luminescent imaging technology. Moreover, in an effort to understand the aggressiveness of MRTK, we were also able to identify MRTK-initiating (stem) cells from established cell lines. In light of possible distant metastasis in MRTK, we evaluated the relationship between CD133-positive MRTK cells and chemokine receptor CXCR4 expression. These results have yielded important implications concerning MRTK biology, and our transplantable cell source coupled with luminescent imaging provides a tool for new preclinical therapeutic strategies against MRTK.

Moreover, an interesting feature of MRT is the occasional occurrence of separate central nervous system primary tumors (16). Thus, the similarity between high-grade medulloblastoma and MRT in terms of aggressiveness allows us to determine whether MRT cells frequently contain initiating cells.

Herein, we established two MRT cell lines from patients with MRT of the kidney (MRTK) and show that tumor-initiating cells of MRTK are frequently present within the CD133⁺ population. Furthermore, we show the characteristic metastatic potential of the MRTK cells in an orthotopic xenotransplantation model of severe combined immunodeficient (SCID) mice. Identification and investigation of the characteristics of tumor-initiating cells in MRT can contribute significantly toward the design of aggressive MRT therapies.

Materials and Methods

Cells, animals, and reagents. JMU-RTK-1 and JMU-RTK-2 cell lines were established from two independent patients after confirming the histologic examination using the Japanese Wilms Tumor Study. Histopathologic analysis of the two cases showed that the cells were round to polygonal in shape with vesicular nuclei, prominent nucleoli, and eosinophilic cytoplasm with rare but typical cytoplasmic inclusions. Briefly, the clinical courses of the two patients are described. (a) JMU-RTK-1 cells were established from a surgical specimen derived from a 4-mo-old boy who presented with macrohematuria and an abdominal mass (4 cm × 4 cm left kidney mass as determined by abdominal computed tomography). No metastatic lesion was observed at this time. Although the patient received chemotherapy following the surgical treatment, local recurrence and pulmonary metastasis developed and the patient died 5 mo after the recurrence. (b) JMU-RTK-2 cells were established from the spinal fluid of 4-mo-old female who primarily presented an abdominal mass (a 6-cm-diameter tumor of the right kidney), although central nervous system metastasis (meningial dissemination) and local recurrence developed following right nephrectomy. The patient died 12 mo after resection of the primary tumor. The Jichi Medical University ethical committee approved of the experiments described in this article.

JMU-RTK-1 and JMU-RTK-2 cells were maintained in DMEM (Sigma-Aldrich) with 10% heat-inactivated FCS and supplements

(17). G401 cells (18) were obtained from the Health Science Research Resources Bank (Osaka, Japan) and maintained in McCoy's 5A medium (Life Technologies) with 10% FCS and supplements. SWT-1 and SWT-2 cells (19) were donated by Dr. Masao Hirose (Naruto University of Education, Tokushima, Japan), and FRTK-1 cells (20) were provided by Dr. Michiyuki Hakozaki (Fukushima Medical University, Fukushima, Japan). The well-characterized SWT-1, SWT-2, and FRTK-1 cell lines were used as representative MRTK cells and maintained in RPMI 1640 (Life Technologies) with 10% FCS and supplements. The cultures were kept in a 5% CO₂ and 95% air humidified atmosphere at 37°C.

BALB/c AJcl-nu/nu (BALB/c nude, 6-8 wk old) and C.B-17/Icr-scid/scidJcl (C.B-17 SCID) mice (8-10 wk old) were purchased from CLEA Japan, Inc., and nonobese diabetic (NOD) C.B-17-Prkdc^{ecd}/J (NOD/SCID) mice (8-10 wk old) were purchased from Charles River Japan. All experiments in this study were approved by the animal ethics review board of Jichi Medical University and done in accordance with the Jichi Medical University Guide for Laboratory Animals and following the principles of laboratory animal care formulated by the National Society for Medical Research.

Phycoerythrin-conjugated anti-human CD133 (clone AC133; Miltenyi Biotec) and phycoerythrin-conjugated anti-human CXCR4 (clone 12G5; eBioscience) antibodies were used for the flow cytometric analysis. Isotype-matched IgG controls were purchased from BD Pharmingen. For the magnetic separation, anti-phycoerythrin MicroBeads (Miltenyi Biotec) were used for the CD133 cell enrichment.

Establishment of luciferase-expressing MRT cells. Firefly (Photinus pyralis) luciferase cDNA from pGL3 basic (Promega) was inserted into the pMSCVpuro retroviral vector (Clontech), generating pMSCV-luciferase (21). GP2-293 packaging cells (Clontech) were cotransfected with pMSCV-luciferase and pVSV-G (Clontech), a plasmid encoding the viral envelope glycoprotein (VSV-G) of vesicular stomatitis virus, using Lipofectamine 2000 (Invitrogen). Supernatants from transfected GP2-293 were incubated with ~50% confluent MRTK cells in the presence of Polybrene (8 mg/mL final concentration; Sigma-Aldrich). Transduced cells were propagated in a medium containing puromycin (Sigma-Aldrich) at 15 mg/mL (luc-JMU-RTK-1, luc-JMU-RTK-2, luc-G401, luc-SWT1, and luc-SWT2).

PCR and reverse transcription-PCR. For reverse transcription-PCR, total RNA was extracted from cells using Isogen (Nippon Gene). Two micrograms of total RNA were used for first-strand synthesis using SuperScript III reverse transcriptase (Invitrogen). The following primers were used for hSNF5/INI1 expression (13): exon 1 sense, 5'-ATGATGATGATGGCGCTGAG-3'; exon 4 sense, 5'-AACCATCAACAG-GAACCGCA-3'; exon 4 antisense, 5'-TGCGGTTCCTCTTGATGGTT-3'; exon 9 antisense, 5'-ATGGAATGTGACCGGAAG-3'; glyceraldehyde-3-phosphate dehydrogenase (GAPDH) sense, 5'-GTATCGYGGAAG-GACTCATG-3'; GAPDH antisense, 5'-AGTGGGTGTCGCTGTTGAAG-3'. PCR conditions for each set of primers included initial treatment at 95°C for 2 min, followed by 30 cycles comprising denaturation at 95°C for 15 s, annealing at 57°C for 30 s, and then extension at 72°C for 2 min. PCR products were analyzed by electrophoresis through a 1% agarose gel.

Flow cytometry and magnetic bead selection. Cells (1×10^6) were washed with PBS and incubated with monoclonal antibody (mAb) for 30 min at 4°C. Following washing with 0.1% FCS-PBS, cells were analyzed using FACSCalibur (Becton Dickinson) and FlowJo analysis software (Tree Star). At least 10,000 events were acquired for each sample. For magnetic bead selection, cells (5×10^6) were treated with phycoerythrin-conjugated anti-human CD133 mAb (Miltenyi Biotec), followed by anti-phycoerythrin MicroBeads (Miltenyi Biotec), washed, and then loaded onto a MACS MS column (Miltenyi Biotec) for positive magnet-based selection. The positive and negative fractions were then analyzed by flow cytometry.

Xenogeneic tumor transplantation model. Cells in exponential growth phase were harvested by trypsinization and washed twice in PBS before injection. For the s.c. injections, cells $(1 \times 10^3 - 1 \times 10^5)$ were

injected into the s.c. space of NOD/SCID mice. To determine the minimal amount of cells capable of engraftment, limiting dilution experiments were done for CD133-positive and CD133-negative cells. Tumor appearance was evaluated using a caliper, and tumor growth at the skin was monitored by calculating the tumor volume (= [length in mm][width in mm]²/2).

For the orthotopic tumor model of the kidney, C.B-17 SCID mice were treated by injection of anti-asialo GM1 antibodies (100 mg/body, Wako) into the peritoneal cavity 1 d before the operation. The left kidney of anesthetized mice was exposed through a left flank incision and partially exteriorized. Cells (5×10^5) were suspended in 0.1 mL Matrigel (BD Biosciences) and inoculated into the renal subcapsular space. Tumor growth was monitored by *in vivo* luminescent imaging.

Histologic examination. Removed specimens were fixed with 10% paraformaldehyde and embedded in paraffin. Sections were then stained with H&E.

In vivo and ex vivo bioluminescence imaging. In vivo tumor progression was examined using the noninvasive bioimaging system IVIS (Xenogen). Tumor-implanted mice were anesthetized with isoflurane (Abbott Laboratories), and D-luciferin (potassium salt; Biosynth) was injected into the peritoneal cavity at 3 mg/body, which was immediately followed by the measurement of luciferase activity. The imaging system consisted of a cooled, back-thinned charge-coupled device camera to capture both a visible light photograph of the animal taken with light-emitting diodes and the luminescent image. After acquiring photographic images of each mouse, luminescent images were acquired with a 1-min exposure time (21, 22). Images were obtained with a 25-cm field of view, a binning (resolution) factor of 8, 1/f stop, and an open filter. The resulting gray-scale photographic and pseudocolor luminescent images were automatically superimposed using software to facilitate identification of any optical signal and location on the mouse. Optical images were displayed and analyzed using Igor (WaveMetrics) and IVIS Living Image (Xenogen) software packages. The signal from tumors was quantified as photons flux in units of photons/s/cm²/steradian.

For the inspection of metastasized organs, various organs of mice were resected to examine tumor-derived photons for micrometastases in the presence of D-luciferin. Direct invasion was evaluated for the following representative organs: the gut and omentum, peritoneum, retroperitoneum, diaphragm, spleen, and bladder. For metastasized organs, the lung, liver, brain, and para-aortic lymph nodes of mice were inspected by luminescent imaging (and histologic examination).

Western blot analysis. Cells were lysed using radioimmunoprecipitation assay buffer [50 mmol/L Tris (pH 7.4), 150 mmol/L NaCl, 1% NP40, 0.25% sodium deoxycholate, 1 mmol/L EDTA, 0.1% SDS, 1 mmol/L Na₃VO₄, and 1 mmol/L NaF] containing protease inhibitor cocktail (Roche Diagnostics). Western blot analysis was conducted using standard procedures. SDS-PAGE was done using 1× sample buffer containing 5% β-mercaptoethanol. Following the transfer of proteins to nitrocellulose membranes, the membranes were incubated for 1 h with rabbit anti-human CXCR4 (ProSci) and anti-GAPDH (Santa Cruz Biotechnology) primary antibodies. The membranes were then incubated for 1 h with secondary antibodies. Chemiluminescent detection was done using an ECL Plus Chemiluminescence Detection Kit (GE Healthcare UK Ltd.) and the photo-intensity was quantified by densitometric analysis (NIH image).

Statistical analysis. P values based on log-rank, Tukey-Kramer, or Fisher's tests were obtained using Instat (GraphPad) or StatView (Abacus Concepts, Inc.). Differences between groups were considered significant if P < 0.05.

Results

Characteristics of established MRTK cell lines. Two cell lines (JMU-RTK-1 and JMU-RTK-2) were established from two patients with MRTK (see Materials and Methods). Both cell

lines showed heterogeneous morphology of adherent and spindle cell types on plastic culture dishes. The approximate doubling time in JMU-RTK-1 and JMU-RTK-2 was 9 and 18 h, respectively. Both cell lines were still viable after 200 passages over a 1-year period.

JMU-RTK-1 and JMU-RTK-2 cells were injected s.c. into the flanks of NOD/SCID mice (Fig. 1A). By 21 days, a visible tumor had formed in all mice that underwent the transplantation.

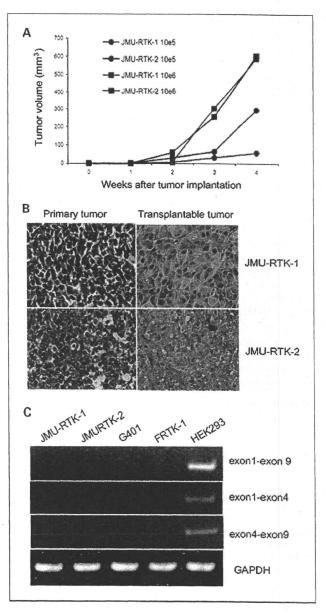


Fig. 1. Characteristics of established MRTK cell lines. A, JMU-RTK-1 and JMU-RTK-2 cells (either 1×10^5 or 1×10^6) were transplanted into the subcutaneous space of NOD/SCID mice and tumor growth was measured at the indicated time points. B, morphology of established MRTK cell lines following xenogeneic transplantation in nude mice. Left, histology of primary tumors; right, morphology of established cell lines following xenogeneic transplantation in nude mice (at 30 d following tumor implantation; H&E; original magnification, $\times 200$). C, analysis of hSNF5/INI1 mRNA expression in established cell lines using reverse transcription-PCR. Top, exon1-exon9; top middle, exon1-exon4; bottom middle, exon4-exon9; bottom, GAPDH as an internal control.

A Kidney Luna LN В 100 JMU-RTK-1 80 **III** JMU-RTK-2 Metastasis (%) G401 60 SWT-1 SWT-2 40 20 Gut & arrentum Lymph node Retroperioneum Peritoreum Lung The Brain Spieen Diaphragum Bladder C 100 **JMU-RTK-1 ■ JMU-RTK-2** G401 80 SWT-1 % Survival SWT-2 60 40 20 0 20 40 60 80 100 Days after tumor implantation

Fig. 2. Metastatic progression of MRTK cell lines in a xenogeneic orthotopic transplantation model. A, representative luciferase images of luc-JMU-RTK-1 kidney tumor at day 30 following tumor implantation (left). Right top, ex vivo inspection of tumor-derived photons; right bottom, microscopic inspection of metastasis in the lungs (left; H&E; original magnification, ×100) and the lymph nodes (LN; right; H&E; original magnification, ×50). B, a representative metastatic frequency of luciferase-expressing MRTK cells. Luciferase-expressing MRTK cells were transplanted into the left kidney of SCID mice (3-5 mice per cell line). Tumor-derived photons were examined ex vivo 30 d following tumor implantation One of two independent experiments with similar results. C, the survival rate in orthotopically tumor-implanted mice. P < 0.05 (JMU-RTK-1, JMU-RTK-1, and G401 versus SWT-1 and SWT-2), log-rank

Moreover, tumors transplanted into immunodeficient mice showed a similar morphology in comparison with the primary tumor of MRTK (Fig. 1B), and cells in the transplanted tumor were round to polygonal in shape, with vesicular nuclei, prominent nucleoli, and eosinophilic cytoplasm with rare but typical cytoplasmic inclusions.

It is known that loss of function in the hSNF5/INI1 gene leads to MRT development. In an effort to determine whether the established cell lines were MRT cells, hSNF5/INI1 expres-

sion was examined by reverse transcription-PCR. As shown in Fig. 1C, hSNF5/INI1 mRNA transcripts were not detected in the established cell lines. Thus, these results suggest that JMU-RTK-1 and JMU-RTK-2 cells possess a loss of hSNF5/INI1 gene function.

Metastatic frequency of MRTK cells. Recent advances in luminescent imaging technologies have facilitated the quantitative analysis of cellular processes in vivo. JMU-RTK-1 and JMU-RTK-2 cells were transduced with firefly luciferase in an

effort to visualize the fate of tumor progression in the living animals. The advantages associated with the use of luciferase as a marker includes its sensitivity (as few as 100 luciferasetransduced MRTK cells can be detected over the background in vitro) and its linear dose-dependent output of light in the presence of D-luciferin (data not shown). Cells (5 \times 10⁵ in 0.1 mL Matrigel) were orthotopically implanted into the left renal subcapsular space of C.B-17 SCID mice. Implanted cells rapidly grew at the left kidney, and strong photons were observed around day 7 posttumor implantation. Although the rapid growth in the primary site masked weak photosignals from potential metastasized sites, metastatic sites at 30 days posttumor implantation were visualized by ex vivo inspection in the presence of D-luciferin (Fig. 2A). Invasion to nearby organs was very high in JMU-RTK-1, JMU-RTK-2, and G401 cells. JMU-RTK-1 cells metastasized at the lung and lymph nodes, and JMU-RTK-2 and G401 cells preferentially metastasized in the lung, liver, and lymph nodes. The metastatic frequency and the direct invasion rate to nearby organs were low in SWT-1 and SWT-2 cells (Fig. 2B). These

results reflected animal survival following orthotopic tumor injection (Fig. 2C). Thus, these results suggest that JMU-RTK-1, JMU-RTK-2, and G401 cells represent potentially aggressive types in MRTK.

CD133 expression in MRTK cell lines and tumor-initiating capacity in NOD/SCID mice. Recent evidence obtained following the investigation of brain tumors suggests that the frequency of tumor-initiating cells may be significantly correlated with aggressiveness (7). Although the origin in MRT remains unclear, the tumor appears as a result of unique neural differentiation and is distinct from neuroblastoma (23). Thus, the similarity between brain tumors and MRT allows us to determine whether the established cell lines frequently contain MRTK-initiating cells. In an effort to enrich MRTK-initiating cells, the cell surface antigen CD133 was analyzed in MRTK cell lines using a flow cytometer. As shown in Fig. 3, the relative abundance of CD133+ cells was ~4% to 6% in aggressive MRTK cell lines. The CD133+ cells were enriched to 13% to 25% using antibody-mediated magnetic bead sorting. This enrichment of the CD133+

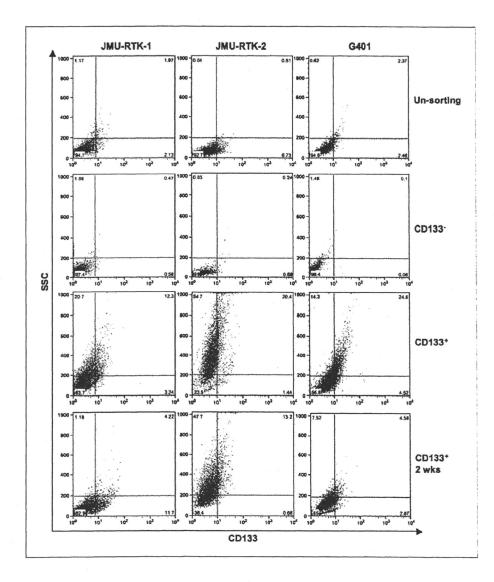


Fig. 3. CD133 expression pattern in MRTK cell lines. Cells were stained with phycoerythrin-conjugated anti-CD133 mAb. Unsorted, unmanipulated cells; CD133⁻, flow-through fraction following anti-CD133 mAb – mediated magnetic bead selection; CD133⁺, CD133-enriched fraction following anti-CD133 mAb – mediated magnetic bead selection; CD133 2wks, 2 wk culture population of the CD133-enriched fraction; SSC, side scatter.